



**Data** 2022-37

監督・脚本：ピエル・パオロ・パゾリーニ

音楽：エンニオ・モリコーネ

出演：テレンス・スタンプ/シルヴァーナ・マンガーノ/マッシモ・ジロッチ/アンヌ・ヴィアゼムスキー/アレドレス・ホセ・クルス・ソウブレッテ/ラウラ・ベッティ/ニネット・ダヴォリ/ルイーダ・バルビーニ

## 👁️👁️ みどころ

“イタリアの異端児”が描く“現代の寓話”を「ピエル・パオロ・パゾリーニ生誕100年記念上映」で初鑑賞！「テオレマ」とは“定理、定式”の意味だが、本作はなぜそんなタイトルに？

本作はブルジョア一家の大邸宅への謎の“訪問者”（テレンス・スタンプ）の性的魅力に、一家が次々とひれ伏していくもの。その異様な展開は、まさに“現代の寓話”だ。

「訪問者は旧約聖書の人物であって、決して新約聖書の人物ではない」そうだが、そのココロは？こりゃ、チョー難解！鑑賞後の論争開始は必至！

日本では猥褻裁判として、「チャタレイ」事件や「黒い雪」事件が有名だが、カトリック教会は本作をいかに受け止めたの？その裁判の結末は？

—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————

## ■□■ピエル・パオロ・パゾリーニ監督作品を初鑑賞！衝撃！■□■

本作のチラシには、「イタリアの異端児パゾリーニが描く“現代の寓話”」と書かれている。同監督は「1975年11月2日、ローマ郊外で非業の死を遂げて45年以上の時を経た今もなお、世界中のシネフィルに支持される」らしい。また、本作は「日本国内においては1970年の劇場初公開以来、映画祭以外では上映される機会がほとんどなかった代表作」らしい。そんな本作が、「ピエル・パオロ・パゾリーニ生誕100年記念上映」で上映されることに。1週間後には『王女メディア』も上映されるから、両作とも必見！

岸田首相の就任から半年を迎えたが、彼が唱えた「新たな資本主義」はまだその全貌や意義が見えてこない。しかし、政府が大企業に対して従業員への給料アップを促したり、大企業のトップ、トヨタが従業員からの賃上げ要求を丸呑みする状況を見ていると、たしかに資本主義も大きく様変わりしているようだ。本作冒頭に、イタリアの大都市ミラノに

ある大工場のオーナーであるパオロ（マッシモ・ジロッチェ）が登場し、「全工場を労働者に譲渡する」と決断するシークエンスはすごい。その衝撃は大きい、なぜパオロはそんな決断を・・・？

## ■□■仏はアラン・ドロン。伊の美男子はテレンス・スタンブ■□■

1967年に『美しい十代』を歌ってデビューした三田明は当時「日本で最も美しい青年」と呼ばれたが、『太陽がいっぱい』（60年）でその美貌と演技力を見せつけたのがフランスのアラン・ドロン。しかし、フランスの美男子がアラン・ドロンなら、イタリアの美男子は本作で謎の“訪問者”役を演じたテレンス・スタンブだ。

アラン・ドロンは本作でタイトルとは正反対の人間の二面性（善悪）を見せつけ、署名偽造のテクニック等で見事な演技を披露したが、本作の“訪問者”にはほとんどセリフがないのが特徴だ。

パオロが、家族や女中たちと共に住むのはミラノの郊外の大邸宅。1960年代のフランス映画の名作は、昨今の「なんでも説明調」の邦画と違って、説明はほとんどない。本作でも、なぜ訪問者がこのお屋敷に住みついているのかは不明だが、冒頭からこの美青年の魅力、とりわけその性的魅力が発揮されていくので、それに注目！スクリーン上では、のっけから、女中エミリア（ラウラ・ベッティ）が訪問者の目の前で、ベッドの上で足を広げ、スカートをずり上げていくのでビックリ！さらに、それに続いて、同じ寝室で寝ていた息子のピエトロ（アンドレス・ホセ・クルス・ソウブレッテ）は、訪問者と、アレレ、アレレ・・・。

## ■□■テオレマとは？この訪問者は何者？その言動は？■□■

イタリア語の「テオレマ」は「定理、定式」の意味で、「神の摂理」を意味するらしい。しかして、本作はなぜそんなタイトルに？また、本作の主人公はテレンス・スタンブ演ずる“訪問者”で、名前がつけられていない。それは一体なぜ？

私はイエス・キリストの物語が大好きで、『聖衣』（53年）、『ベン・ハー』（59年）や『キング・オブ・キングズ』（61年）等で描かれた、イエスが各地で見た“奇跡”に興味を持っている。それはきっと、ギレルモ・デル・トロ監督の『ナイトメア・アリー』（21年）で見た読心術や幽霊ショーのようなトリックを伴うものではなく、本物の奇跡だったはず。私はそう信じている。

そう考えると、本作冒頭からテレンス・スタンブ演ずる“訪問者”が見せる性的魅力も、トリックなしの本物！女中や息子に続いて、妻のルチア（シルヴァーナ・マンガーノ）や娘のオデッタ（アンヌ・ヴィアゼムスキー）、さらには一家の主たるパオロまで、次々と彼の性的魅力にハマっていく姿を見ていると、これはまさに、若き日のイエスが伝道の旅の中で見た奇跡の数々と同じ・・・？なぜブルジョア一家の面々は次々と彼の言動（といっても言はなく、動ばかりだが）にハマっていくの？この訪問者（というより、闖入者と言った方が正確だが）は一体何を考え、何をしようとしているの？観客は誰もそう思っ

てしまうはず(?)だから、まさに本作は「イタリアの異端児ピエル・パオロ・パゾリーニが描く“現代の寓話”」!

## ■□■ “訪問者” をどう解釈?この「REVIEW」は必読! ■□■

私がかねてより尊敬していた映画評論家の佐藤忠男氏が先日亡くなった。本作について、彼がどのような解説をしているのかは知らないが、本作のパンフレットには、これも私が尊敬している四方田犬彦氏の「REVIEW 『テオレマ』のなかの定理」があるので、これは必読!そこでは、ピエル・パオロ・パゾリーニ監督が、ただ一言、「この訪問者は旧約聖書の人物であって、新約聖書の人物ではありません。」と語っていることを、「重要な発言である」と指摘したうえ、「この名前もない青年は、福音書に説かれているような愛や憐憫といった感情で動いているのではない。彼は、世界の『定理』を説き預言を口にするために、世俗の人間のもとを訪れたのだった。といっても、ことさらに預言を口にするわけではない。彼が出現したという事実がすでに預言なのだ。」と解説している。

本作では、訪問者の性的魅力に溺れ、次々と性的関係を結んでいく息子、妻、娘たちの“破滅”が続いていくから、この訪問者(闖入者)は、ブルジョア一家からみれば、諸悪の根源!さらに、冒頭で自らの工場(全財産)を自主的に労働者に譲渡すると宣言したパオロは、本作ラストでは何とも奇妙な醜態をさらけ出すうえ、火山の荒野を一人でさまよいながら死んでいくという、20世紀ではあり得ない姿がスクリーン上に映し出されるので、それに注目!『十戒』(56年)や『アラビアのロレンス』(62年)なら、モーゼが荒野の中で、ロレンスが砂漠の中でさまよい歩く物語も理解できるが、なぜパオロが素っ裸になって荒野をさまよい歩かなければならないの?これは一体何を予言しているの?

## ■□■ 猥褻裁判は『黒い雪』以前にも!その論点は?結末は? ■□■

日本では表現の自由は憲法で保証された基本的人権の一つ。しかし、猥褻罪との境界をめぐっては、武智鉄二監督の『黒い雪』(65年)やイギリスの作家D・H・ローレンスの作品『チャタレイ夫人の恋人』を日本語に訳した作家・伊藤整と、版元の小山書店社長小山久二郎に対して刑法第175条のわいせつ物頒布罪が問われた「チャタレイ事件」が有名だ。芸術?それとも、ワイセツ?その線引きは難しいわけだ。

そんな視点で本作を観れば、本作でテレンス・スタンプが演じた“訪問者”に“神の摂理”を語らせることを、ローマ法王やカトリック教会は許すの?ヴェネチア国際映画祭で女中のエミリア役を演じたラウラ・ベッティが最優秀女優賞を受賞すると共に国際カトリック映画事務局賞を受賞したことで、本作がイタリアのカトリック界で物議を醸したのは当然。そしてまたそれと同時に本作が猥褻罪に問われて裁判に発展したのも当然だ。他方、裁判でピエル・パオロ・パゾリーニ監督は無罪になったうえ、裁判になったこと自体が逆宣伝になって、本作は大ヒットしたらしい。さらに、エル・パオロ・パゾリーニ監督自身が“天使と悪魔の間にいる、曖昧な人物”と語る“訪問者”の解釈を巡って大論争になったそう。

ちなみに、パンフレットには、「テレンス・スタンプが語る『テオレマ』 フェリーニとパズリーニ、演じることと人生」が6頁にわたって掲載されている。そこで彼は、「教会がこの映画を攻撃し、わいせつ罪で裁判にかけたことは、すばらしい宣伝になりました。とても無名な映画で、せいぜい4人ほどのドラッグクイーンと天才くらいしか見ないだろうものでしたから。ローマ法王がこの映画に反対すると、誰もがこの映画を見たいと思うようになりました。だから、個人的にはこれ以上ないほど幸せなことでした。」と語っている。裁判におけるさまざまな論点も勉強しながら、本作についてはしっかり論じ合いたい。

2022（令和4）年4月6日記